

井上靖

霧の道
比良のシャクナゲ

比良のシャクナゲ

霧の道

上靖

新潮社版

比良のシャクナゲ・霧の道

〈井上靖小説全集3〉



昭和49年5月20日発行

昭和54年12月20日3刷

定価 1200 円

© Yasushi Inoue, 1974.
Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一電

話・業務部(〇三)二六六一

五一一、編集部(〇三)二六

六一五四一一郵便番号・一

六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えいたします。

目次

比良のシャクナゲ	七
霧の道	三四
ある兵隊の死	九
年賀状	一〇七
断雲	一〇九
七人の紳士	一二
流星	一四〇
ほくろのある金魚	一五二
星の屑たち	一五三
早春の墓参	一七四
死と恋と波と	一九三
石庭	二二六

二分間の郷愁

雷雨

波紋

碧落

銃声

舞台

黄色い鞆

無蓋貨車

結婚記念日

かしわんば

表彰

勝負

山の湖

三七

二二〇

二四八

二六八

二七九

二九七

三二七

三三五

三三七

三四九

三五六

三六八

三七七

傍觀者

百日紅

大いなる墓

自作解題

四〇一

四三六

四三六

四四九

装
画
加
山
又
造

井上靖小説全集 第3卷

比良のシャクナゲ

早いものだ、もう五年になる。五年ぶりでわしは堅田の旅館へやって来た。この前に来た時はそろそろ戦局がただならぬ様相を呈し始めた終戦前年の春だったから、あれから五年の歳月が経っているわけだ。随分遠い昔のような気もするし、つい昨日のような気もする。総じてわしは近頃とみに時間の観念に疎くなっているようだ。若い時はこんなではなかった。先月の解剖学雑誌で、わしのことを鑿たる八十翁と書き居った奴があったが、わしはまだ八十にはならぬ。二年ほど間がある。しかし、いずれにせよ、他処目には翁と映るものと見える。翁という言葉にはどこかにぬくぬくとしたところがあって、わしは嫌いだ。わしは老学徒という言葉が好きだ。老学徒三池俊太郎。

この主人が琵琶湖を賞するには、三井寺、粟津、石山、その他にも名だたる琵琶湖望見の地は十指に余る。しかし

こと比良を望むにおいては、湖畔広しと雖も、堅田に勝る地はなく、特にここ霊峰館の北西の座敷に比肩し得るところはあるまいと自慢し、比良の山容が一番神々しく見えるところから、この宿を霊峰館と名附けたのだと説明したことがあったが、まことにこの座敷から眺める比良は美しい。琵琶湖を挟んで彦根から眺めた時の、あのいかにも比良連峰といった蜿蜒と東西に延びた大きい景観はないが、彫りの深い数条の溪谷をゆったりと抱き、裾広く湖西に足を踏んまえ、山頂の一部を雲にかくしていることの多い姿は、他の駄山に見られぬ気稟と風格を持っている。たしかに美しい。

それにしても、あの主人が亡くなってからどれだけになるだろう。二十年、いやもっとになる。わしが啓介の事件で二度目にここに来た時、すでにあの主人は中風で呂律が怪しかった。そして確かあれから間もなく二、三カ月後にわしはあの主人が他界したという通知を受け取ったと記憶している。あの時、わしにはあの主人が随分よぼよぼの老人に見えたが、あの時まだやっと七十そこそこだったのだろう。考えてみると、わしはすでに今日、あの主人より十年近くも長く生きのびている勘定になる。

この家は何も変わらない。わしが初めてここに来たのは、二十四、五の頃だったから、わしがこの家のこの座敷に坐

ってから——あの時から、いつか五十年以上の歳月が流れて
いるわけである。五十年間変わらない家というのも珍しい
ものだ。亡くなった主人に生きうつしの息子が、同じよう
な顔つきをして、同じような恰好で、玄関横の薄暗い帳
場に坐っている。この部屋の古ぼけた床の山水も布袋の置
物もそっくりあの時のものかも知れない。わしの家などひ
どい変わりようだ。何もかも変わってしまった。家具から
人間から、人間の考え方で、何から何まで変わらないも
のと言つては一つもない。しかもそれが年々歳々変わつて
いる。時々刻々変わつていふと言つた方がいいかも知れな
い。またあれほど変わる家というのも珍しい。縁側に簾椅
子を出すと、例外なく、一時間後にはもう向きが変わつて
いるのだからやり切れない。

ああ、なんというのびやかさだろう。こうした落ち着い
た静かな時間を持ったのは何年ぶりだろう。これが学者の
時間というものだ。こうして誰にもじろじろ見られずに、
一人で簾椅子に腰かけて、湖を見ている。比良を見ている。
意地の悪い視線はどこにもない。無神経な癪にさわる誰の
話声も聞こえない。お茶の熱いのを飲みたければ、手をた
たいて女中を呼べばいい。呼ばなければ夕方まで誰も顔を
出す者はないだろう。ラジオも聞こえない。レコードもピ
アノも聞こえない。かん高い春子の声も聞こえない。傍若

無人な孫たちの声も聞こえない。いやに近年横柄になつて
来た弘之の声も聞こえない。

が、それにしても、今頃は家の中はさぞ大騒ぎしている
ことだろう。わしが急に居なくなったので、さぞ家中がひ
っくり返っていることだろう。近來万一を慮^{おもんばか}つて絶対に
一人で外出せぬわしが、家を出て五時間以上も帰つてこな
い。さすがの春子も周章^{あわ}てるほかはあるまい。おじいさま
が居なくなつた。おじいさまが居なくなつたと、例のきや
んきやん声で近所だとか知合いを探し歩いていることだろ
う。弘之は電話で知らされて、大急ぎで会社から帰宅し、
あいつのことだから、親戚には知らせたくないし、警察に
は届けたくない、と言つてどこに電話をかけてもわしの消
息はわからん、気難しい顔で部屋の中を、ただのそのそと
歩き廻っていることだろう。苦勞性のあいつのことだから
弟妹のところだけにはもうわしの失踪を知らせたかも知れ
ない。定光は大学の研究室から家へ廻つて、大体こうい
つた事件で呼び出されるのは真平だといった顔で、わしの書
斎で、わしの椅子に腰掛けて、苦り切つて茶でも飲んでい
るかも知れない。北野から京子も駆けつけているだろう。
こんなことでもなければ、定光も京子も家には寄りつきは
しないのだ。いくら忙しいか知れないが、一人の親のここ
ろへたまには菓子ぐらい持つて訪ねて来ても罰はあたるま

い。それを黙っていれば、半年も一年も親のことは忘れてゐるのだから、揃いも揃って親不孝者どもだ。

明日までいくらでも心配するがいい。明日の昼ひよっこり帰ってやろう。七十八のわしにも自由がある。出歩く自由がある。当世流行の自由というものがある。黙って家を出ても悪いことはあるまい。わしは若い時のんだくれて方泊まり歩いたが、みさになど一言も断わったことはない。三日も四日も黙って家をあけたが、ついそ一度も、弘之のように女房に電話で断わったことなどない。大体弘之は春子の尻の下に敷かれている。子供には甘いし、女房には甘いし、こまった奴だ。

それにしても明日帰宅したら一悶着は免れぬ。これだから、わたくし、おじいさまのお守りは芯が疲れますのと、春子が定光や京子に聞こえよがしに喚くことだろう。あれのことだから当てつけがましく畳に俯伏して泣くかも知れない。弘之も、定光も、京子も、それぞれ一晩心配させられた恨みをぶちまけずにはおくまい。わしは何とも言うまい。黙って、あれらの顔を一人一人見渡して、書齋へはいって行く。弘之が追いかけて来て、分別臭い顔をして、今後一切こういう意地の悪いことをして貰っては困ります。幾つだと思っていらいっしやる、年をお考えなさい。こんなことをされては子供たちが堪らない。世間体が悪い。大体

お父さんは僻^{ひが}んでいなさる。なんとも言うがいい。わしは返事をすまい。返事をしないで、壁にかけてあるシュアルベ先生の写真のあの滋味溢れるような静かな目をじっと見詰めていよう。そして心が静まったら、直ぐノートを開いて『日本人動脈系統』の第九章の仕事をする。わしはペンを走らせる。

Im Jahre 1899 bin ich in der Anatomie und Anthropologie mit einer neuen Anschauung hervorgetreten, indem ich behauptete: —

一八九九年に余は解剖学と人類学に於て、新しい見解を發表して注目を受けた。その中で余は主張した。——あれらにはわしは何を書き始めたか解りはすまい。三池俊太郎の学者としての永遠の生命と誇りが輝いているこの冒頭の一行を、誰も理解はしないだろう。第一弘之に至ってはてんから読めんじやろう。学校で何年間かドイツ語をやった筈だが、あれほど忘れる奴も珍しい。定光の方は独文だから、それにゲーテを訳しているから、読むぐらひは読めるだろう。それも、しかしゲーテだけしか読めんかも知れない。小さい時からあれにはそんなところがあつた。あれのゲーテも危いものだ。ゲーテという文豪について、わしは

ついに知るところがないが、恐らくあれのはあれ流の、氣難しいゲーテだろう。詩人ゲーテは少なくとも、あんな親とも兄妹とも合わぬ我儘な人間ではない筈だ。ゲーテ、ゲーテの一つ覚えで、肝心の父親が何をしているか知らぬ息子も困りものだ。日本人の動脈系統の解剖学的研究の意義が、軟部人類学の地味なしかし大切な仕事で、そもそも何を意味しているか、それがいかなる学術的価値を持つか、てんでちんぷんかんぷんだろう。弘之に至っては、いや弘之ばかりではない、春子、京子、京子の主人高津などに至っては、わしのこの一行より百円の金の方が有難いと思うだろう。そのくせ、学士院会員、××賞受賞者、あるいはQ大学医学部長といったわしの過去の世俗的名声だけは利用する。浅ましいくらい他人の前ではわしの名を担ぎ出す。それも結構だが、それほどわしの子供であることが誇りなら、もっとわしを理解し、わしを大切にすべきではないか。

大学の横谷や杉山あたりも、あるいは弘之からわしの失踪を知らされているかも知れぬ。みんなわしが家出して死ぬかも知れないと案ずるだろう。時勢を憤慨して自殺する氣になったと思うか、研究生活の不如意が原因して死ぬ氣になったと思うか。でも死んだ啓介がいま生きていたとしたら、あいつだけにはわしの氣持が解るかも知れぬ。あいつは人なつっこい澄んだ綺麗な目をして、わしの氣持に一

番近いところを探し当てるだろう。長男坊でわしの貧乏時代長屋で育ったので、弘之や定光にはない変に氣の付くところがあつた。親の目から見ても確かに繊細なところがあつた。

だが、わしは啓介がどちらかと言えば一番嫌いだつたな。啓介の方も他の子供ほどわしになつかなかつた。わしの膝の上に来たことがない。あれが物心がつく時分、わしはドイツに留学していて、ずっと別れて暮らしていたためかも知れぬ。だが、啓介が生きていたら、あれだけはいまのわしの氣持をちゃんと探りあて、冷たい目でじろじろ見ながらも、黙ってわしの氣持のすむように取り計らってくれそうな氣がする。

それにしても、わしは死なん。死ぬなんて、そんなくだらん丁見は持たん。「日本人動脈」のやりかけた仕事が残っている。百まで生きてもやり切れぬ仕事で、わしが死んだら誰にもやれない労多くして功少なき仕事で、わしひとり待っている。わしの生命はかけがえのない大切なものじゃ。わしの生命の価値はわし一人が知っている。そうじゃ、この世でわし一人かも知れぬ。一九〇九年ベルリンで開かれた人類学会の席上で、クラアチ教授が、学者として三池の価値は恐らく当の三池以上に私が高く評価している、自重を祈ると、わしがこの世で覚えた最も清冽な讃辭をわ

しにくれたことがあったが、あのクラアチ教授もすでに今は亡い。佐倉も井口も死んでしまった。佐倉、井口の二人だけには、わしの仕事の価値が解っていたようだったが、それに、あの二人も豪かった。立派な仕事をした。しかしあの二人の名前も学界から消えて久しいな。あの二人の仕事の価値にしても、真に正当に評価する者は、やはりわし一人かも知れんな。

それはともかく、わしはなぜ急に堅田にまで来たくなったのだろう。考えてみると自分ながら不思議な気がする。堪らなくこの霊峰館の北西の座敷に坐って湖の面を見なくなったのだ。矢も楯も堪らなく、湖の向うの比良の山容を仰ぎたくなったのだ。こうした直接の原因は一万二千円の端金に關係しているが、ほんととは決してそんな事じゃあない。そんな事じゃあない。

昨日わしは弘之に、書物を出版する時の用意に大学の地下室にとっておいた紙の一部を売った一万二千円ほどの金を請求した。弘之はへんてこな嫌な顔をした。あれは大方わしの面倒を見ているし、この時勢で生活は苦しいから、わしの紙を売った金を自分のものとして、生活費の一部に充当しても当然だと思っていたのだらう。しかし、わしはそうは思わぬ。あれはわしの文字通りのライフ・ワークたる『日本人動脈系統』の第三冊を印刷すべき紙である。

戦時中八方工面した金でやっと手に入れ、戦災を考慮して大学の地下室に保管して貰って今日に至ったわしにとっては何物にも替え難い大切な紙である。くだらぬ小説や辞書の類が印刷される紙とは違う。軟部人類学の創始者三池俊太郎の五十年の辛苦が印刷され、世が世なら全世界の大学と図書館に送られる筈のものである。そこらにざらにある紙とは違う。わしの生命が何百万のドイツ語となって印刷される筈の紙である。わしはその紙を売った金を机の曳出の中に入れておいて、何はともあれ、気分だけでも落ち着いて、仕事をしたかったのだ。わしは昔から貧乏生活をして、続けてきたが、気持はいささかも貧乏人ではなかった。借金こそしたが、買いたいものは買い、食いたいものは食い、酒は毎日浴びるように飲んで来た。貧乏人になりきってしまつて学問ができるか。学問をしたことのない奴には解らん。

それにその紙のことも、わしがつい口を滑らせたので、弘之も春子もそれを当てにし始めたのだ。わしがもし黙っていれば、その金を当てにしようにも、当てにすることはできなかった筈ではないか。

あれはわしの金じゃ、一銭も手をつけて貰っては困ると、わしは言った。嫌味でも咎でもない。本当にそう思ったのだ。

「お父さん、そりゃあ、少し勝手でしょう」

弘之がこう言ったので、わしはむっとした。生活が苦しいから、お父さん、その金の一部を融通して戴けないか。まことに申し訳ないが、そうして戴けたら助かる。こう謙遜に言えば、わしは即座に考えを改めて、半分とは言わずも、五分の一ぐらいは出してやっただろう。

それを、春子までが茶の間から顔を出して、

「あなた、それはお父さまのおっしゃる通り、お父さまのお金ですわ。一銭残らずお父さまにお渡しした方がよろしいですわ」と、いやに聞き直った口調で吐かし居った。

「そうじゃ。わしの金じゃ。だらしなく孫の飴代などにされては堪らん」

とわしも言った。チェツと弘之は舌を鳴らした。自分の俸ながら、ああした軽薄極まる仕種には堪えられぬ。みさが生きていたら、わしにこんな思いはさせなかっただろう。だが、みさも氣だてが弱い女で、晩年は弘之や春子の御機嫌を伺い始めていたので、それも当てにはならぬが、しかし、他ならぬ仕事の紙を売った金のことだから、そうそう子供たちの言いなりにはならなかったろう。

それが今朝になると、もっと不可^{いけ}ない。わしが書齋で仕事を始めようとしていると、春子が一万二千円の紙幣束を持って来て、机の上に置いたまではないが、

「お父さま、だんだんお金がお好きになりますわ」

と言った。わしは金が好きにならん。わしは七十八年の生涯、清貧の中に研究と共に生きて来た。学問以外好きなものはない。金が好きなら臨床の教授をやって、やめて開業して、今頃は大金持になつとる。薄暗い研究室で死体などをいじくり廻して、実業家たちの寄附を仰いで、一冊も売れぬ横文字の書物など作らなかつた筈だ。春子はわしに正反對のことを言った。勘違いにもほどがある。学問に全く縁のない、会社員の家庭の低俗なる空気の中であって、しかもこの時勢でその乏しい月給で養われていては、自分自身で些少なりとも、へそくり金でも机の中に貯えておきでもない限り、わしは心が落ち着かぬ。落ち着いて仕事はできぬ。彼等は常々わしが恩給を生活費として提供しないことが不服のようだ。しかしあれを生活費に充当したら、わしがアルバイトの学生に支払う金はどこから出るか。あれは目下のところわしの唯一の研究費用じゃ。第一、子たる者が親の恩給を当てにするようでは、あまりに情ないではないか！

わしは春子には返事しなかつた。一言でも喋ると口が汚れると思った。わしは春子から受け取った一万二千円の金を、春子の目の前で、震える手で一枚一枚数えた。確かに百二十枚あったので、

「よろし、あちらに行きなさい」

と言った。わしは暫く机の前に坐っていた。オウスを点て、菓子なしで一服飲んだ。古い萩焼の茶碗（これはわしの古稀の祝いの時、名も知らぬ学生が、留守に玄関に来て黙っておいて行ったものだ。わしはこの学生も、この茶碗も氣に入っている）を胸もとで静かに傾けると、濃緑の液体の小さい泡沫が、静かに茶碗の壁をひいて行った。

それから庭に目を遣ると、門から続いている植込みの向うを、このところ二、三度見掛けている貧相な洋服姿の男が、玄関の方へ歩いて行くのが見えた。その男が大森屋の番頭であることはわしも知っていた。大方、また春子が帶か着物でも売るのであらう。着物は自分がこの家に来る時持ってきたものだから売るのはよろしい。しかし売るほど困ってはいない筈だ。それほど困っているのなら、秀一のピアノの稽古をやめればいい。大体天分のない十二歳の男の子に、高い月謝を払ってピアノを仕込んで何になる！ わしはそのためにどのくらい悩まされているか！ 音楽は天才だけが生命をかけてやるものじゃ。八つの桂子に絵を習わせていることも同じことじゃ。一切合財、無駄というものじゃ。情操教育、情操教育と言うが、情操とは、そのよなことから生まれるものではない。学問の貴さも教えずして、なんの情操教育であるか。

孫たちの無駄な教育もそうだが、生活費をきりつめるにはまだ他に沢山ある。春子は先日、四条で靴磨に靴を磨かせたと言った。価二十円という。呆れるほかはない。すると弘之はそれをたしなめるどころか、自分は京極の入口で三十円取られたが、あそこの方がずっと丁寧だったと言った。四肢健全なる夫婦が自ら靴を磨かずして、他人の手を藉りて五十円を仕払う。何をか言わんやである。

それでいて生活が苦しいと言ひ、着物を売る。矛盾だらけである。主人が酒を飲んで、飲んだくれて、生活が苦しいと言ふのなら、これは解る。わしの一生は、事実、そんな日の連続だった。研究と酒。解剖室と酒場。しかしわしの酒は、同じ浪費といつても少し意味あいが違う。わしは靴を磨かせて酒を節するようなことはせん。他人の靴を磨いても酒を飲んだらう。酒はわしにとつては、わしの欲望だからだ。学問と同様、己むにやまれぬ欲求だからだ。

大森屋の番頭の玄関を開けるベルが鳴り響いた時、わしは立ち上がって洋服に着換え、わしの一番好きなポーランド政府より贈られた小型の赤字第一等名誉章をチョッキにつけ、書きかけの第九章の一部の草稿と独逸語の辞書一冊を鞆に詰めた。それから一万二千円の金をポケットに入れ、ポケットでは危いと思つたので、内ポケットにしまい直すと、縁側から降りて、中庭を横切り、裏門から街路へ

出た。気が立っているせいか歩く度に膝の関節ががくがく鳴った。

そして電車通りまでゆっくり歩いて、折よく走って来たタクシーを捉え、堅田まで幾らで行くかと訊いた。二百円とでも言うかと思ったら、十八、九の若い運転手は二千円と答えた。思わず怒りで両手がぶるぶると震えた。しかし、運転手が莫迦にしたような顔つきで、ハンドルを廻して走り去らんとしたので、わしは「よし、やってくれ」と言った。運転手は坐ったまま内側からドアを開けた。むかしの運転手は降りてドアを開けたものだ。

自動車の動揺が殊に烈しくこたえた。これは不可んと思つたので、運転手にゆっくり走るように命じ、わしは腕の前に組み、肩をすぼめ、なるべく心臓の表面積を縮めて、心臓の負担を軽減するような姿勢をとって、目をつむった。京都の市街を外れて、京津国道へ出ると、そこからはコンクリートのドライブ・ウェイなので、よほど動揺も少なくなった。蹴上から山科、大津。道が浜大津から曲がって湖畔に沿うと、比良の峯が美しく行手に姿を現わした。ああ、比良！ とわしは心の中で叫んだ。わしは家を出てタクシーをとめた時、殆ど無意識に堅田と行先を告げたのだが、わしの採ったとっさの処置は狂っていなかった。わしはまさしく琵琶湖を、比良の山を見たかったのだ。堅田の霊峰

館の座敷の縁側に立って、琵琶湖の静かな水の面と、その向うの比良の山を心ゆくまで独りで眺めたかったのだ。

わしが初めて比良の山を見たのは、あれは、わしが二十五の時だった。——そうだ、それより数年前に、わしは丁度その頃売り出された写真画報という雑誌の口絵で、比良の山を見たことがあった。まだ第一高等学校の学生の頃だった。本郷の下宿で、そのの娘が持っていた雑誌を何気なく手に把って開いた時、開巻第一頁に、当時流行の紫色の色刷りで載っていたのが「比良のシャクナゲ」の写真だった。

わしは今でもはつきりと憶えている。その写真は、はるか眼下に鏡のような湖面の一部が望まれる比良山系の頂で、高山植物・石南花イソギクのみごとな群落が、岩石がところどころ露出しているその急峻な斜面をまるでお花晶のように美しく覆っていた。その写真を見ているうちに、その時わしはなぜかはっとした。なぜはっとしたかわしにも解らなかったが、とにかく心の一端に、一種言うべからざるエーテル的な、揮発性の刺激を覚えて、改めて仔細にその比良の石南花の写真を見直したものである。

その時わしは思ったのだ。いつの日か将来、やはり同じ頁の片隅に円形に区切られて紹介されている、日に何回か